

月刊 インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 105 年)



中山太郎 森喜朗 マンモハン・ 福田康夫 ヘーマント・K
日印友好議員連盟会長 日印協会会長 シン首相 日印友好議員連盟副会長 シン駐日大使

10月23日 シン首相歓迎レセプションにて 於 憲政記念館
(鹿子木理事撮影)

目次

| | |
|------------------------|------|
| 1. シン首相歓迎レセプション | P. 3 |
| 2. 『インド駐在を終えて』寄稿 | P. 6 |
| 3. JICA だより 第2回 | P.11 |
| 4. 月間インド・ニュース | P.13 |
| 5. イベント情報 | P.21 |
| 6. 新刊書紹介 | P.22 |
| 7. 掲示板 | P.23 |

1. シン首相歓迎レセプション

マンモハン・シン首相訪日

日印協会と日印友好議員連盟共催による歓迎午餐レセプション

マンモハン・シン首相は、10月21日から23日まで年次定期首脳会談のため日本を公式訪問されました。最終日の23日には日印協会と日印友好議員連盟の共催で、歓迎午餐レセプションが永田町の憲政記念館で行われました。会場には当協会の森喜朗会長、鈴木修副会長(スズキ会長)、大橋信夫副会長(三井物産会長)、坂根正弘副会長(コマツ会長)以下多くの協会関係者、中山会長以下友好議員連盟の議員の方々、外務省はじめ関係省庁のご来賓、そして在日インド人コミュニティーの代表の方々約60名を加え総勢200名を超える歓迎会となりました。



歓迎会は、司会・進行役を平林理事長が務め、先ず森喜朗当協会会長、次いで中山太郎日印友好議員連盟会長が歓迎の挨拶をされ、それを受けてシン首相から答礼のご挨拶を頂きました。

次いで福田康夫前総理大臣日印友好議連副会長のご発声で、両国の友好親善の発展を祈願して乾杯を行ったあと、シン首相は、出席された方々全員のご挨拶を受けられました。壇上で一人一人と言葉を交わされながらの握手に、日本側参加者も多数の在日インド人も、大変感激されていました。

協会にとりましては、大きな催しでしたが、会場の設営等にご協力頂いた株式会社シンリョー相談役比良竜虎氏(協会理事)や多数の協会関係者のご協力やご支援で、無事盛況のうちに終える事ができました。この場を借りて御礼申し上げます。(シン首相の訪日の成果については、月刊インド・ニュースをご参照下さい)

以下に、森喜朗会長、シン首相の挨拶を掲載致します。

【森喜朗会長ご挨拶】



おはようございます。

マンモハン・シン首相閣下及びインド政府閣僚をはじめとする代表団の皆様の来日を、心から歓迎申し上げます。

また、ご多忙なスケジュールにも拘らず、本日の日本・インド友好議員連盟と私ども財団法人日印協会の歓迎レセプションにご出席を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

閣下が2004年に首相に就任されて以来、インドのリーダーとして国の内外で目覚ましいご活躍をされ、経済発展の面では申すまでもありませんが、国際政治の舞台でもインドの存在感が一段と高まってきております。このことは、貴国とのパートナーとして大変嬉しく、また心強く思っております。

私は、2000年8月にインドを訪問し、当時のバジパイ首相と「21世紀における日本・インド両国のグローバルパートナーシップ」の構築で合意致しました。これにより、1998年の核実験により傷ついた伝統的に友好的な日印関係は、再度上昇気流に乗りました。それから8年、両国関係は、「グローバルな戦略的パートナーシップ」にまで発展してまいりました。

日印間では、政府首脳や閣僚をはじめ、政府、経済界、学術文化界など各界の関係者が頻りに往来するようになりました。首相閣下ご自身が、一昨年12月の日印首脳会談、今年7月の洞爺湖サミット、そして今回と、僅か2年弱の間に3回も訪日して頂くことは、インド政府と国民の皆様との関係強化への熱意の表れと深く感謝しております。

私ども日印協会は、1903年(明治36年)に設立されて以来今年で105年を迎えました。日本がインドから得た文明の恩恵に鑑み、アジアの同胞として手を携えていくことの大切さを訴え、内外の関係者のご支援を得て、多くの実績を挙げてまいりました。

幸い、日本におけるインドの存在感は着実に増しております。東京周辺に在住するインドの方々には1万人を超えるとのこと。両国の関係が発展し、真のパートナーとなれるかどうかは、結局は人々の交流を通じての相互理解がいかに進むかによると思います。2006年、シン首相は私の手をとられまして「あなたは、インドと日本をグンと近付けてくれました」とおっしゃって下さいました。歴代総理のインド訪問によって両国がしっかりした絆で結ばれるようになりました。そして、経済界はじめ、あらゆる分野の皆様の日印の交流によって、立派なグラウンドができつつあります。

今日は、多くのインドの方々にもご参加頂きましたが、私ども日印協会も、皆様のご理解・ご支援を頂き、両国関係の発展に努力することをお約束申し上げ、私のシン首相閣下及び皆様への歓迎の言葉とさせていただきます。

【シン首相ご挨拶】



森喜朗元首相・日印協会会長、中山太郎日印友好議員連盟会長、福田前首相閣下、ご列席の皆様、ご丁寧な歓迎のお言葉まことにありがとうございます。多くのインドにとっての友人の皆様からの手厚いご歓待を頂き誠に光栄に存じます。わが同輩のインド人の皆様にも囲まれ大変嬉しく思います。

今日ここに森元総理、福田前総理がお見え頂いたことが、インドと日本の関係がどれだけ深まっているかということの顕れであります。ご列席の皆様、インド及び私個人に寄せられた暖かいお気持ちに感謝致します。

インド国民は日本との友好的関係を高く評価していることを、確信しております。日印協会は、1世紀以上に亘り両国間のより緊密な文化的・経済的な関係促進に向け、その最前線におられました。1903年にこの協会を設立した洞察力ある当時の政治家たちは、インドと日本が新生アジアの主要な柱となることに確信を抱いていました。設立当初、特に経済面をはじめとする印日間の友好の絆が促進されたのは、彼らの努力によるものです。過去からの日本との繋がりを現代に復活させた偉大な人々の中には、インドが生んだ偉大な息子達、哲学者ヴィヴェーカーナンダ、偉大な詩人ラヴィンドラナート・タゴール、産業界の先駆者ジャムシェードジー・タタ、がおられます。インドの初代首相である、ジャワハルラール・ネルは1950年代終わりに日本を訪れ、アジアの2つの民主主義国家間における、永続的な友好の新時代の礎石を築きました。

インドに寄せられた開発支援、特に産業の近代化に対しまして深く日本に感謝申し上げたいと思

います。60年間我々はこの関係を永続的に進化拡大させて参りました。我々の関係の次なる段階としまして、貿易・技術・投資の流れの拡大を目指し、グローバル化及び両国の経済面での相乗作用がもたらす機会を利用すべく努めています。森喜朗元総理の洞察力溢れるご指導の下、2000年に行われた画期的なご訪印により我々の関係に新しい段階が開かれたのです。森元総理が2ヶ国間の取り組みを活性化させ、進化させようと留意してこられましたことに、深く感謝申し上げます。

2 国間に存在する印日関係強化に関する広範な政治的合意形成に向けて重要な役割を果たしておられる、日印友好議員連盟及び中山太郎会長に感謝申し上げます。

世界は多面的な難問に直面しております。エネルギー及び食糧危機、グローバル経済における景気後退の側面が多数の開発途上国の経済発展を脅かす要因となっております。テロは平和愛好社会の脅威となっております。気候変動と環境の劣化は、美しい惑星に脅威を与えています。

こうした挑戦に立ち向かう時、我々は日本の賢明な助言と指導力に眼を向けています。グローバルな平和とこれを脅す問題解決に当たり、日本のこれまでの発展の経験と、調和を重んじる日本の伝統を、参考にしたいと思えます。

私は1971年から頻りに日本を訪れ、印日関係の繁栄・発展を眼にするのが数十年來の心からの願ひでした。今日、印日関係の变革を目にすることができるとは、大変大きな喜びです。このように、グローバルな戦略的な関係に発展したのは、2000年の森元総理の訪印からです。それにふさわしいグローバルな役割を果たす用意のある2つの大国として、我々は良好な2国間関係の堅い基盤の上に立っています。良好でダイナミックな日本は、アジアと世界の平和と安定の要であるとインドは信じています。

インド人コミュニティーが、日本で貢献してきたことを称えたいと思えます。彼らは、両国の人々の間に友好と理解の架け橋を築いてこられました。彼らの貢献はインドの誇りであります。自ら切り開かれた地でのご幸福をお祈りし致します。本日ここにお集まりの皆様全員が、2ヶ国関係の強化に向け、更なる努力をされますことを私は確信しております。それは我々両国にとり、地域にとり、世界にとり重要なことです。

改めてこの場を借り、私にこういう機会を与えてくれましたことに、感謝申し上げます。

(文中の写真は、佐伯健三氏撮影)

2. 『インド駐在を終えて』 前丸紅インド会社社長 津田直樹氏より寄稿

本年4月に5年の任期を終えてインドから帰国された協会会員の津田氏より、現地で円滑に仕事を進めるための貴重な経験を、全29話にまとめて寄稿頂きました。紙面の都合で今月と来月の2回に分けて、ご紹介致します。



<津田 直樹 氏 略歴>

1950年 東京都 出身

1974年 慶応義塾大学法学部卒、丸紅株式会社入社、非鉄金属部配属

1985年～2002年 丸紅米国会社ニューヨーク本店 丸紅欧州会社ロンドン店 勤務

2003年～2008年 丸紅インド会社社長

現在 株式会社日本伸銅に出向

インド駐在を終えて

私は2003年4月から2008年4月までの満5年間を丸紅インド会社の社長として、正に発展し続けるインドをこの目で見て、皮膚感覚で体験する貴重な機会を得た。この記憶が薄れたり、肌感覚が鈍ってしまう前に、インドという国とインド人との上手な付き合い方について、日本人ビジネスマンの参考になるように具体的に、かつ、わかり易くまとめてみた。これからインドとのつながりを作ろうとしている人たちはもちろんのこと、既にインドと商売をしている方々にも参考になるように書いたつもりである。おりからの「インドブーム」に乗って、巷に溢れかえる多くのインドについての書物や記事は、日本在住の学者やジャーナリストが短期間だけインドに出張して書いたものがほとんどである。私も何度かそのお手伝いをさせて頂いたり、取材を受けたりしたが、どうしても時間的な制約があり、突っ込み不足になっているケースが多いと思う。ここではインドに5年間住んで、実際の日常のビジネスに深く入り込んだ者だけが知りうる実践的でかつ分かりやすい内容となるように努力した。また、読み物としても肩の凝らないような内容になるように配慮した。これからインドに駐在しようとしている人たちやインドに会社を設立しようとしている方々の参考になればと思い、5年間の駐在期間中に得たことをわかりやすく説明したつもりである。読者諸兄弟からの忌憚のないご批判を頂戴できれば幸いである。

1. 度の合ったメガネで見るな!(インドビジネスの心得)

どこの外国に住んでも基本は同じだと思うが、その国の長所をできるだけ探し出して評価してあげることが重要だと思う。どの国にも良い点が必ずあるはずである。それを探し出すその努力を惜しんではならないというのが、私の海外生活を快適に送るための秘訣である。その過程で、自分が駐在している国を好きになるきっかけがみつければベストである。反対に自分の駐在している国が好きになれないと、本当に良い仕事はできないと思う。特にインドのような開発途上国では、目をこらして悪い所を探し出すときりがなくなってしまう。嫌なこと、気に入らないことのオンパレードということになってしまう。どこの国に住んでも「大変なことや嫌なことはたくさんある」といった感覚が重要だと思う。「そういえば日本でも同じようなことがあったな」という感じで日々を過ごしていくのが良いと思う。「郷に入らば郷に従え」ということが重要である。日本流にびしびしと細かいことを言い出したらきりが無い。また、細かい所を見ればおのずとあらが目立つ。些細なことを神経質に追わないようにするのが良い。そうすれば、インド人の「鷹揚さ」(いいかげんさ)も、インドの「汚さ」もそれほど気にならなくなる。よく比喩的な表現として使っているが、インドを見るには度の合ったメガネをかけずに、0.5くらいの軽い近視の状態で見ると良いと申し上げてきている。悪い所を見始めるときりがなくなってしまうということである。

2. いいかげんだが悪気はない

「明日までには絶対に仕上げる」とか「 日までには必ず連絡する」といっても日本流にそれをまとも信じてはならない。彼らには、たとえそれが実現できなくても「罪の意識」は皆無である。ならば、そこまで断定的にいうなといっても、これを改める気配は全くない。「悪気」はないので、最初から割り引いて聞いておくしかない。しかし良く考えてみると、過去に私が駐在したニューヨークでもロンドンでも同じようなことがよくあった。注文した家電製品の納入日に会社を早退して家で待っていて、何度ふられたことか。逆に考えれば日本が例外なのかもしれない。日本の宅配便の時間指定など、もはや芸術的と言わざるを得ないレベルである。したがって、このインドのいいかげんさもインドだけを責めるべきではないのかなと、今になって冷静に考えているところである。我々の自衛策は時間的な余裕を持つということしかない。最初から遅れを見込んで日程を作るということに尽きると思う。これはインドに工場を建設する場合についてもいえることである。

3. インドは好きになる人と嫌いになる人にはっきりと分かれるが、あなたの場合は？

多くの日本からの来訪者から「インドは好きになる人と嫌いになる人と両極端に分かれるといいますが、あなたの場合はどちらですか?」と聞かれた。私は「好きとか嫌いというよりも、インドには常日頃から感謝している。インドに駐在しているおかげで、日本ではとてもお会いできないような日印の重要人物とお会いできたり、経験できないようなことを毎日のようにさせてもらっている。感謝してもらいたくないと思っている」と回答してきた。帰国して6か月が経過したが、今もこの気持ちに変わりはない。これからインドに駐在する方には、「インドならではの経験が得られるし、それがあなたの人生を豊かにしてくれるはず。インド人の友達もきっとできますよ」と申し上げたい。いうまでもないことだが、インドのような生活環境の厳しい国に駐在する日本人はものすごく絆が強くなる。在留邦人の人数が多くないこともあって、本当に皆で助け合っているという雰囲気がある。仕事面でもいわゆる系列とかグループを越えた関係を構築できるはずで、それがインド進出の大きなメリットの一つともいえるであろう。

4. できるだけ高いカーストの現地雇員を採用すべき

インドで採用するナショナルスタッフは、できるだけカーストの高い人を雇うべきである。カースト制度が現在も色濃く残っているインドでは、できるだけ高いカーストの人を採用すべきである。取引先に自分よりもはるかに高いカーストの人がいれば会うことさえ難しい。怖気ついてしまうことが多い。インドでは各人の姓でだいたいのカーストと出身地がわかる。したがって、低いカーストの人の場合は、名刺交換をただで怖気ついてしまうということが起こるのである。特に、新しい会社を立ち上げる際には、いわゆる人事部長や総務部長になるインド人スタッフの重要性は極めて重要である。このポストの人物には、思い切って高額な給与を用意し、かつ、上述の理由からできるだけ高いカーストの人を採用すべきである。また、できれば地元の有力者につながる人が好ましい。中国ほどではないかもしれないが、インドでもローカル・コネクションがモノをいってることが多い。この人物が中心になって、他のインド人スタッフを採用していくことになるわけだが、自分よりも高いカーストの人たちを「部下」として採用しにくいことはご理解頂けると思う。結果として、その会社全体のカーストが低目になってしまうことになるので、最初に採用する人事部長・総務部長にあたる人物が極めて重要になるのである。くどいようだが、この人事部長か総務部長に抜擢する人物の給料には大判振る舞いすべきである。世界共通だと思うが、インドでもそれなりの人物を雇うには高額な給料が必要となる。それが、あなたの会社の人件費の総額を結果として抑え込むことになるということをお願いしたい。この最初に採用するインド人があなたの会社の成否を決めるといっても過言ではない。

5. カースト制度はなくなる

インドでは、カースト制度のおかげで約 11 億人の人たちが大きな争いごとを起こさずに国の秩序が保たれているといえる。カースト制度は一種の「あきらめ」を国民に教えている。究極のジョブシェアリングということもいえると思う。洗濯屋さんの息子は洗濯屋になり、コックの息子はコックになるのが普通である。このことによって、世の中の微妙なバランスが維持されているといえるわけである。「カースト制度はなくなるのか？」という質問を過去に日本で開催した「インド講演会」でほとんど漏れなく聞かれたが、いつも「なくなる」と回答してきた。今でもこの考え方は変わっていない。少しずつ形を変えながら根強く残っていきと見ている。知り合いのインド人にも聞いてみたが、「5 千年もかけて作ってきたものを 50 年間でなくせると思いませんか？」という回答であった。また、カースト制度の縛りから逃れるには、イスラム教やキリスト教などの他の宗教に改宗するしかない。ただ、IT エンジニアのような新しい職種がどんどんできてきていることから、カースト制度が少しずつ変化していっていることも事実だと思う。

6. インドでは長幼の序を重んじる

インド人は日本人よりもはるかに長幼の序を重んじるので、既に述べたように、特に人事部長・総務部長には、若くても 40 代後半の人物が良い。あまり若すぎると「抑え」が効かなくなるので、ある一定の年齢を過ぎた人物が良い。また、これは日本や欧米諸国と同じであるが、インドでも引き抜きにあう人物は一般には 40 歳前までである。この点からも総務部長・人事部長にあたる人を採用する際には、45 歳後半以上の方が良いと思う。尚、インドでも「引き抜き」は頻繁に行われている。この点についてもある程度の「開き直り」が必要となる。引き抜かれるような立派な人材を雇用していたということを楽しむかもしれない。特に昨今の好調なインド経済のせいだ当社の優秀なインド人スタッフに対する給料のオファーは現状の 2 倍以上というのはざらである。外国企業よりもインド企業に引き抜かれることの方が多い。

また、インドで新しく販売のビジネスを興そうとする際には、その業界で広く知られた人物を高額の条件で抜擢するのが近道である。おそらくどの業界にもいわゆる「ドン」と呼ばれる大物がいるので、その大物を引き抜いてくるのが重要である。昨年ある日本の機械メーカーで聞いた話であるが、日本製の機械をインドで販売するためにその業界の「ドン」と 2 千万円の年俵で契約したが、結果は大成功であったとのことであった。その「ドン」が過去に築いてきた「縁」を生かして、いち早く素晴らしい販売網を作ってくれたといっていた。

7. デリーゴルフクラブはカースト制度の縮図である

デリーゴルフクラブという名門ゴルフクラブがデリーの中心にある。インドに初めて来られた方々には、「お泊りになるオベロイホテルは東京でいえば帝国ホテルに匹敵します。デリーで最高のホテルです。デリーの心臓部とも言える場所にあります。そのオベロイホテルの隣にあるのがデリーゴルフクラブですが、東京の日比谷公園に 18 ホールのチャンピオンコースがあるのと同じ感覚です。」と説明してきた。デリー市内の中心部にプロのトーナメントを開催するゴルフコースがあるというこの贅沢さは何なのか？英国植民地時代の遺産であるが、英国人は他のアジアの都市でも同じように、街の中心部にゴルフ場を造ってきた。このデリーゴルフクラブに行くとカースト制度の縮図を簡単に見ることができる。明らかな身分制度である。メンバーの多くは政府・軍・大企業の幹部とその OB だが、週末でさえもプレーしている人たちの平均年齢は 70 歳くらいではないかと思えるくらいに「老人」が多い。彼らの中にはプレーを終了するまで、一度も自分のボールに触れない人たちがいる。つまり、ティーグラウンドでもグリーン上でも、全てのボールのセッティングはキャディーが行うわけである。ホールアウト後にボールを拾うのもキャディーである。キャディーよりも下のランクにはコースのメンテナンスを担当している人たちやレストランのボーイなどがいるが、きれいなコンディションを維

持していくために、たくさんの人たちが働いている。インド社会の縮図をここに見ることができる。ここに来ると、「この素晴らしい既得権を彼らが手放すことはないな」といつも思っていた。実際にそのとおりだと思う。このあたりにもカースト制度が根強くインド社会で根づいていることがわかる。もちろんインドでもゴルフ場が格好の「社交場」であることは欧米諸国と同じである。このクラブのおかげでずいぶんとインドの要人との交流を深めることができた。今、振り返ってもその存在の有難さを痛感している。

8. 英語が通じるので通訳に牛耳られることがない

上流階級の間では、インド人だけの会話になっても英語で話し続けることがよくある。ヒンディー語が共通語ということになっているが、南部に行けば全くといってよいほど通じない。しゃべれてもしゃべりたくないの、ヒンディー語はわからないということにしている人たちも結構いるようである。一方で英語を理解できる人の比率は 25%位といわれているが、我々が仕事で付き合う人たちは 100%英語が通じると思ってよい。また、彼らは一つのステータスシンボルかのように英語をしゃべることに「快感」を感じていると見られる。実際に何度も経験したことだが、パーティーの席上で数人のインド人と私が会話をする。当然のことながら言葉は英語であるが、私が彼らの話の輪の中から抜けても長々と英語で話し続けていた。インド南部のケララ州では中近東とかシンガポールへの出稼ぎに出る人が多いことから、上流階級ではなくても英語が堪能な人が多いが、他州でも日本人が仕事関係で付き合うインド人は 100%といって良いほど英語がしゃべれるので、中国などと比較して通訳に牛耳られてしまうということは非常に少ないといえる。工場の現場の「職長」クラスでも、大多数の日本人よりも流暢に英語を話す人が多い。現場の労働者には英語が通じにくい、「職長」クラスを通して現場労働者を指導していけば良いわけである。5年間の駐在期間中に何人のインド人と話し合ったのか正確な数字は持ち合わせていないが、一人として英語がしゃべれなかった人はいなかった。

私が上述のデリーゴルフクラブで前駐インド日本大使とインドの要人とゴルフをした際に、この要人が連れてきたのが彼の親戚の 19 歳の若者であった。ナショナルチームの一員になっているような腕前であったが、ゴルフだけでなく彼の英語も素晴らしかった。非常にきれいな発音であったので、いろいろと聞いてみた。そこでわかったのは、彼の父親はデリー出身の人だが、母親は南部の州の出身とのことで、ヒンディー語が得意でないということであった。したがって、家庭では英語が共通語になっており、ヒンディー語は家庭では父親と話をする時にしか使わないといっていた。この話はヒンディー語がインド全土で通じないという実例である。それだけに英語の重要性は今後もインドの社会の中でもどんどん上がっていくはずである。インドでのいわゆる「共通語」は英語である。

9. インドにはまだ女性差別が残っている

ヒन्दゥー教の影響もあると思うが、インドの社会全般でまだまだ女性は差別されていると感じることが多かった。特に取引先とか官庁で KEY PERSON として私が名刺交換をした女性は極めて少なかった。もちろん、弁護士とか会計士といった資格を必要とする職業では女性の進出もかなりあるようで、特に懇意にしていた女性弁護士は極めて有能で、ややこしい問題の解決にずいぶんと力を貸してくれた。また、工場の現場では日本とは比較にならないほど女性労働者の数が少ない。アパレルの仕入先を訪問した際に、50 人以上の人たちが一つの部屋でミシンを踏んでいたが、彼ら全員が男性であったのには驚いた。少しずつ女性の社会進出も見られるようになってきているが、日本の現状と比較してもかなり遅れているといわざるをえない。一方で、日本の大手自動車部品メーカーのインド法人の社長から聞いた話だが、その会社では意識的に女性労働者を増やす方針をとってきたと。その狙いは、女性労働者は一般に政治に興味があらず、組合活動にもあまり積極的には参加しない傾向が強いことと、男性労働者が彼女たちに良い所を見せようと良く働くようになるという二つであった。狙いどおりにいっていると非常に満足そうであった。女性の特性として世界的に共通のこのようであるが、

品質の検査などの単純作業は、女性の方がはるかに集中力があって適しているとインドでも思った。アパレルの品質検査会社のラインを見せてもらった時に感じたことだが、男性は隣の人と話し込んでいる人がかなり目についたが、女性は黙々と働いていた。今後、少しずつではあるが女性の社会進出がさまざまな分野で進んでいくように予想しているし、そのことがインドのさらなる経済成長のためにも重要なことだと思う。このことが次項で述べる「核家族化」につながってくるのである。

10. 核家族化が新しいビジネスチャンスだ

インドでも確実に「核家族化」が大都市を中心に進んできている。以前のように親子三代が同じ屋根の下に住むということは、大都市では非常に少なくなってきた。このことが、住宅や生活物資の消費動向に急激な変化を与えつつある。冷凍食品や紙おむつなどの欧米の影響を色濃く受けた製品の普及がスピードを上げてきている。昨年、デリー郊外の中産階級向けの「マンション」のモデルルームを見学したことがあったが、入口の外に3畳くらいの小さな部屋がついており、トイレも中に入った。これは使用人が待機するための部屋である。ただ、この開発業者の話では、最近の若いカップルは使用人を全く使わずに、家事の全てを自分たちでこなす人たちが増えてきていると説明してくれた。この小さな部屋を倉庫や自転車置き場として使っている人たちが多いとのことであった。このように、インドの伝統的な大家族主義は都市部を中心に崩壊しつつあり、急速に核家族化が進みつつあるようである。ここに上述のとおり、新しい生活関連物資の市場ができつつあるといえる。現在の日本企業のインド進出を見れば一目瞭然であるが、あまりに自動車とその部品メーカーに片寄りすぎている。新しい分野として、上記の「生活関連物資」の生産・販売拠点の構築、さらには物流に関与していくというあたりにもビジネスチャンスがあるのではないかと思っている。それらを後押しするのが間違いなく「核家族化」である。

11. 女性のファッションも欧米化が進んできた

若い女性の服装も2003年の着任時と2008年の離任時では大きく変わってきている。インドの流行は「ボリウッド」(ハリウッドをもじった言葉で映画が盛んに作られているエリア)のあるムンバイからスタートしているようであるが、以前は保守的な女性が非常に多かったデリーでさえも、最近では若い女性たちのTシャツにジーンズという姿が非常に目につくようになってきている。以前のサリーやパンジャビスーツといった伝統的な服装から、欧米の影響を色濃く受けたファッションが急速に若い女性たちの心をとらえ始めている。実際に彼女たちに聞いたが、結婚式などの特別な場でしかサリーは着ないとのこと、日本に於ける和服と似ているのかなとの印象を持った。デリーの超一流ホテルにはヨーロッパの有名ブランドの多くが店をかまえ始めており、デリー郊外にはアメリカ風の巨大なショッピングモールがオープンし始めている。ここに入っている店の多くが女性をターゲットにしていることは日本や欧米と同じである。インド経済の成長と歩調を合わせるように、これらの店舗の高級店化が進んできている。冷凍食品・紙おむつ・女性の生理用品・ティッシュペーパーや輸入女性衣料はこれから大きく伸びていくものと予想している。

12. 対日感情は極めて良好

インドでの対日感情は一般に良好といえる。過去に日印間で紛争を起こしたことがないこともあって、中国での対日感情とは比較にならない。ただ、インド人の上流階級の人たちの目はあくまでも米国に向いており、英語という「共通言語」もあって、彼らが米国に持っている親近感はかなりのものである。それが証拠に彼らが子弟を海外留学させる際に、ほとんどの人たちが米国を選んでいる。勿論、上述のとおり、日本に対してもそれなりの尊敬の念を持ってきている上流のインド人が多いことは、駐在したり合弁企業を立ち上げたりする際には、非常に有難い点である。 (来月号に続く)

3. JICA だより 第 2 回

第2回目の「JICAだより」は、技術プロジェクト「マディヤ・プラデシュ州リプロダクティブ・ヘルス・プロジェクト」のチーフアドバイザーである山形洋一氏による寄稿です。

<山形 洋一 氏 略歴>

1946 年大阪生まれ、東京大学農学部卒、農学博士(応用昆虫学)

1971 年日本の NGO の手伝いでネパール滞在

1972 年インドを三等列車で周遊

インド復帰を夢見て国際協力の道を選び、JICA や世界保健機関(WHO)の昆虫学専門家として中米、アフリカで熱帯病を媒介する昆虫の駆除法開発に携わる。

1991 年より JICA の国際協力専門員

主な著書『面白く学ぶネパール語』(国際語学社)

日本の質をインドに(1)

インドでの技術協力はやりにくい、と言われている。早口の英語、手を汚したくない技術者、傲岸な高級官僚、日本から教わるものなどないという大国意識。技術協力の相手としてインドは「可愛くない」のだ。

1970 年代初頭にバックパッカーとしてインドに訪れて以来、インドで暮らすことが私の夢だった。そのために選んだ技術協力の道だが、まずは中米とアフリカで修業、地球を半周してやっとインドにたどり着き、2005 年から JICA の「マディヤ・プラデシュ州リプロダクティブ・ヘルス・プロジェクト」を始めた。プロジェクトの上位目標は妊産婦死亡率を下げる。直接目的に「妊産婦へのサービスの質の改善」を掲げた。

高度経済成長を謳歌するインドも、田舎の診療体制はおそろしく貧弱だ。貧富の格差を縮めるべく始まった国家農村保健ミッション(NRHM National Rural Health Mission)のおかげで、地方の病院・診療所にも金が回るようになったが、急なことで現場では使いあぐねている。そこで私たちは現場を巡回して、金の使い道を示す。どちらかと言えば経営コンサルタントのような仕事だ。

最初は大変だった。他の援助機関が NRHM に多額の拠出をしているのに、こちらは手ぶら同然である。独行型プロジェクトは許さない、と言われ、まず彼らの成果を下敷きに仕事を計画した。姑や嫂にいびり出されぬよう、相手の家風に合わせる姿勢である。

ユニセフなどの実績を参考にまず実施したのが、准看護助産師(ANM Auxiliary Nurse Midwife)向けの産前ケア研修である。幸い好評で、受講者の一人は「JICA の研修にはザイカ(ヒンディー語で“味”の意味)がある」と言ってくれた。彼らの業務に即した講義や実習、教程のさまざまな工夫、講師の親身な態度などが好評の理由だ。

現場の実務者に光をあてる姿勢は、たしかに JICA の伝統かもしれない。私たちは受講者の任地にもでかけて彼らの職場を見て回り、改善策を話し合った。こうした方法は今まで無いと言われ、逆に悲しい思いがした。



写真 1 「産前ケア」の実習風景
ANM が互いに血圧を測る

日本の質をインドに(2)

好評だった准看護助産師(ANM)の研修も、始める前のヒアリングでは「無駄だから止める」と言われたものだ。言ったのは州保健省の幹部たち。ANMの実態を知っているわけではなく、ただの偏見からだ。下は下でまた、上を信じていない。この上下の乖離が問題だとすれば、その間をつなぐだけでも意義があろう。

NRHMの新戦略が出ると、JICAは先陣をきって現場で試験し、具体的な指針にまとめて州と共有する。研修教材、記録・報告様式、診療施設整備の指針、保健省と女性子供省が共同して毎月行う「村の保健・栄養の日」運営ハンドブックなどが、こうして現場と中央の往復運動の中で作られた。



写真 2 村の保健・栄養の日
運営は保健省と女性子供省の協力で実施

確定版は州の予算で増刷される。それが組織内で実際に運用されるためには、NRHM推進のために雇用されたDPM(District Programme Manager)のようなミドル・マネージャの巻き込みも重要だ。

プロジェクトは知識創造の経営体である。現場で生まれたさまざまなアイデアが、移動の車の中で討議される。込み入った話はボパールの事務所に持ち帰り、ブレンストーミングの過程を白板に示し、構造を探る。問題点が整理されれば方針もおのずから定まり、作業分担は民主的に決まる。互いの持ち場を熟知してどこにでもカバーに入れるチームワークが頼もしい。

他の機関で働いた経験の豊かなインド人スタッフは、今までできなかった何かがJICAで実現できる、と張り切っている。心根がさすがらしく、腕に覚えのあるツワモノに囲まれて、私はまるで真田幸村だ。細かいことは彼らに任せ、私はただ優先課題を示し、実績相応の評価をする。印象的で普及力のあるレトリックが必要なときは、しばしばヒンディー映画のセリフや歌詞を引用する。(事例はウェブサイト <http://www.jicamprhp.org/>参照)

今までいろいろな国で仕事をして、それなりに楽しんで来たが、インドは格別乗りが良い。知的刺激が強だけでなく、悠々たる楽観を共有でき、さすがにガンディーを生んだ国だ、と思うことがある。

4. 月間インド・ニュース(2008年10月)

1. 下院選挙及び州議会選挙へ向けて各党の動き

南デリーのジャミアナガル地区においてイスラム過激派2人が射殺され、警官1人が死亡した9月19日の事件に関し、社会主義者政党(SP)は、右銃撃戦に疑問があることが証明されれば、マンモハン・シン政府への支持を撤回すると政府に脅しをかけた。マイノリティ(ムスリム)層にはムスリムが狙い打ちされたとの疑念が広がっており、SPは明らかにこのムスリム票に目をつけたものと見られている。UP州における कांग्रेस党との議席調整については、 कांग्रेस党が伝統的議席を譲ろうとしないため話し合いは暗礁に乗り上げたままで、今後の話し合いの予定もたっていない。(*10月5日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月16日、 कांग्रेस党のマイノリティ担当部署は、司法調査を要求する SP から BSP に至る世俗主義の政党の熱気を感じ、これらのライバル政党に先んじられることを恐れ、この銃撃戦への徹底的調査を要求する運動に参加した。(*10月17日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月19日、 BJP は、いくつかの政党はジャミアナガル銃撃戦を政治的利益を引き出す「ATM」として利用しており、治安部隊の士気を沮喪させていると非難した。

(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月19日社会主義者政党(SP)は州議会選挙に先立ち、40%の議席をムスリム候補者に留保すると発表した。(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

中央の選挙管理委員会は10月14日、下院総選挙を前にして、デリー他次の4州の議会選挙の日取りを発表した。

デリーおよびミゾラム州:11月29日

ラジャスターン州:12月4日

マディヤプラデーシュ州:11月25日

チャッチスガー州:11月14日と20日の2回に分けて実施

他方、ジャンム・カシミール州については選挙日取りの決定が見送られた。

(*10月14日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月19日選挙委員会はジャンム・カシミール州議会選挙については、11月17日、23日、30日、12月7日、13日、17日及び24日の7段階に分けて実施されると発表した。

新たな州議会は来年1月9日までに発足しなければならず、今回の決定はかかる要請に応えるものであるが、アマルナート寺院土地紛争のあおりで、分離主義の過激派が選挙のボイコットを主張しているため、果たしていくつの政党が選挙に応じるか疑問視されていた。しかし、ナショナル・ कांग्रेस(NC)、 BJP および कांग्रेस党が選挙を歓迎しており、人民民主党(PDP)も選挙をボイコットするのは政敵である NC を利するだけであり、選挙に応じるであろうと見られている。(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月11日、UP州政府はラエバレリ地区にある「鉄道貨車工場用地割り当て」を、農民の憤りや法と秩序の問題を理由に解除した。州政府は5月19日政府命令にて189.25ヘクタールの土地を割り当てており、10月14日には कांग्रेस党総裁ソニア・ガンディーにより同工場の鋤入れ式が行われる予定であった。(*10月14日タイムズ・オブ・インディア紙)

कांग्रेस党のスポークスマン、マニシュ・テワリは10月15日、「ラエバレリおよびアメティは4つの開発プロジェクトを得るところであったが、かかるスキームを歓迎する他の州と異なり、UP州政府はこれを停止した。UP州首相の政治は恐怖と報復と汚職に基づいている。マヤワティ女史は州首相としての責任を果たし、彼女の党にあたえられた任務を遂行するよりも、政治的報復に、より熱心であるように見える」と語った。

(*10月16日タイムズ・オブ・インディア紙)

これに対しマヤワティUP州首相は、開発プロセスを止めているとの主張を一蹴し、公式記録によれば20の工場がインディラ・ガンディーの時代からラエバレリに設置されたが、いまだに稼働しているのは9つにすぎず、その他は閉鎖されている。開発プロセスからは一握りの कांग्रेस党員が恩恵を受けているにすぎず、ダリットやOBC(その他の後進カスト)やマイノリティはなんの利益も得ていないと反論し、同地域における貧困と失業について कांग्रेस党指導部を非難した。(*10月16日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月19日、マヤワティが主宰する州内閣はラエ・バレリ地区のラールガンジの189.25ヘクタールの土地を90年リースで鉄道省に付与することを決定した。これによって、鉄道貨車工場建設をめぐるUP州と中央との紛争は終わった。(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

日印協会註: マヤワティはソニア・ガンディーに対する嫌がらせから、土地提供を中止しようとしたと考えられるが、かかる行為により経済開発に反対するトリナムル・ कांग्रेस党のママタ・ベナジーと同じ轍を踏む危険性に気が付き、土地付与中止命令を撤回したものと考えられる。

SP党党首マラム・シン・ヤダブはUP州首相マヤワティが कांग्रेस党のラルフ・ガンディーがカンプールにおいて大学生に演説することを妨害した点に言及し、「UP州では専制政治が民主主義に取って代わった。専制政治は長くは続かない。それが終息する日は非常に近い」と語った。(*10月27日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月26日、アジア欧州首脳会議の帰路の機中にてマンモハン・シンは記者の質問に対し次のとおり答えた。

早期の総選挙を否定し、選挙は予定どおり実施される。

次期総選挙に首相候補として出馬するか否かについては、時が来ればその時に決定されるであろう。

左翼と袂を別った点については、左翼の同僚と別れたのは良かったとは思っていない。反社会的分子により作り出されるコミューナルな地域的な分裂に対処するために、すべての世俗主義、民族主義を信奉する政党は共に戦うべきである。

(*10月27日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月27日、左翼諸政党はマンモハン・シン首相の将来左翼政党と一緒に仕事をしたいとの希望を拒絶し、政府の経済政策を元に戻すよう同首相に要請した。CPI(M)政治局員シターラーム・イエチュリーは、「シン首相が心底から世俗主義へ関心があるのであれば、民生用核取引であわてて米国に屈服する前にこの問題を考えるべきであった。」と語った。

(*10月27日ヒンドゥ紙)

日印協会註:CPI(M)党書記長カラットは、「米国との核取引に関する 123 協定の署名は、米国への完全な屈服でインドの国益に反するもので、将来の CPI(M)の戦略を練るうえで考慮されるべきトピックである。」と語っており(*10月14日タイムズ・オブ・インディア紙)、当面 CPI(M)は非 कांग्रेस、非 BJP で、大衆社会主義党(BSP)と一定の了解を取り付け第三戦線を形成することに努めるものと見られている。

しかしながら、インドの首相として BSP のマヤワティを推せるかと言えば、品性の点で問題があり(お金に汚い、生きているのに自分の銅像をあちこちに立てる等)、未だ立場を鮮明にしていない。

他方、CPI(M)政治局 No.2 のイエチュリーは कांग्रेस 党幹部と親しい関係にあり、米国との核取引は外交問題としては重要問題ではあろうが、山積する国内問題を考慮すれば、世俗主義を信奉する政党として कांग्रेस 党と行動を共にする可能性は排除されない。今回のマンモハン・シン首相の発言は कांग्रेस 党から CPI(M)へ手をさし伸べたものとして注目に値しよう。

11月5日テルグデサム党の創設者 N・T・ラーマラオの息子で有名な映画俳優でもある N・バラクリシュナが政界にデビューした。スーパー・スターから政治家に転出したチランジーヴィに対抗し、テルグデサム党(TDP)は 100 万人を超える大規模な集会を開き、力を誇示したが、右集会で、バラクリシュナは、TDP が政権に復帰することを支援することを誓い、「この巨大な群集を目にして、TDP が政権に復帰すること、チャンドラバブー・ナイドゥが再び州首相になることについては、何の疑いもない。」と語った。(*11月5日タイムズ・オブ・インディア紙)

2.テロ関係

10月21日夜、マニプール州のインパール西区において、二輪車に仕掛けられていた爆弾が爆発し、17人が死亡し30人が負傷した。(*10月22日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月23日、ムンバイの反テロ部隊は ABVP の元全国書記 プラギヤ・シン・タクール(女性)を含む3人を9月29日のマハラシュトラ州のマレガオンの爆破テロ犯として逮捕したが、さらに25日、退役陸軍少佐ラメーシュ・ウパディヤイを含む3人を同じ容疑で逮捕した。イスラム・テロリストの存在は知られていたが、マレガオン爆弾事件でヒンドゥ過激派もまたテロリズムに走っていることが明らかになった。今回の逮捕で CPM はヒンドゥの分派であるバジラング・ダルやヒンドゥ・ジャグラン・マンチの禁止を呼びかけている。

(*10月25日タイムズ・オブ・インディア紙)

11月2日シヴ・セーナの重鎮パール・タツケレイはマレガオンの容疑者たちを擁護し、「いかさま師の世俗主義者たちがアフザル・グル(国会議事堂襲撃犯)を支持するのであれば、何故我々がプラギヤ・シン・タクールやラメーシュ・ウパディヤイを愛し、彼らを誇りとしてなぜ悪い」

と発言し、全ヒンドゥコミュニティに彼らを支持するよう呼びかけた。

また、プラカーシュ・ジャヴァデカル BJP スポークスマンは、「シヴ・セーナがメレガオン爆破容疑者に法的支援をすることに反対しない。RSSですら支援を約束している。私的資金が誰かを助けても何ら問題はない。これは、個人の権利である」と発言し、シヴ・セーナを擁護した。

(*11月2日ヒンドゥ紙)

11月2日 कांग्रेस党幹部で元グジャラート州首相でもあったディグヴィジェイ・シンは「マレガオンでの爆破テロ容疑者プラギヤ・シン・タクールをナゲンドラ・モーディの率いる州政府は資金援助していた。彼女は先の選挙でもモーディを応援する運動をしていた。BJP がトラブルと必ず爆弾テロが発生するが、これは奇妙な附合である」と語った。

11月5日 インド陸軍の現役軍人が、9月29日のマレガオンでの爆弾テロに関連し、資金や爆弾を提供したとの疑いで逮捕された。現役の軍人がテロ攻撃の関連で逮捕されるのは初めてのことであり、内務大臣は「由々しいことである」と述べた。

(*10月5日インディアンエクスプレス紙)

10月30日 アッサムの州都グワハティ及び他の3つの町でほぼ連続して発生した13回の爆弾テロにより、66人が死亡し、約470が負傷した。治安当局はバングラデーシュに本拠を置くHUJI(イスラム聖戦運動)の犯行を疑っているが、その背後にHUJIの助けを借りたUFLA(アッサム解放統一戦線)が居る可能性を排除していない。(*10月31日ヒンドゥ紙)

10月31日 死者は75人となった。さらに12人が瀕死の状態にある。パテル内相は10月31日現地を訪れ、状況を視察したが、現段階で犯人を特定するには早すぎると語った。

(*11月1日ヒンドゥ紙)

11月1日、マンモハン・シン首相とUPA 総裁ソニア・ガンディーは現地を訪れ、状況を視察した後、シン首相は、「この非道な行為の責任者が誰であれ、断固たる措置をとる。もし、他国の政府が関与しているのであれば、それらの政府に対し、しかるべき措置をとる。我々は調査で集められている手がかりを調べているところだ」と語った。

(*11月2日タイムズ・オブ・インディア紙)

3. マハラシュトラ州における排他主義勢力の跋扈

10月19日 シヴ・セーナの活動家達はムンバイにおける鉄道採用試験にやってきた北部地域の受験生たちを殴打し追い払った。MNS(注)総裁ラージ・タックレイは「鉄道委員会はローカル新聞に仕事の広告を出さなかった。そのためにマハラシュトラ人はいろいろなポストに申請する機会を失った」と言い、かかる攻撃を正当化した。

(注):シヴ・セーナの指導者バル・タックレイの甥ラージ・タックレイが2006年1月叔父の政党を辞め、新しく結成した政党。MNSとはマハラシュトラ再建軍の意味。

(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

ムンバイにおける非マハラシュトラ人に対する暴力を十分抑えることができていないとの野党や同盟党からの非難にさらされ、中央政府は州政府に対し3つの警告をしたことを明らかにし

た。警告は10月19、20、21日にだされており、中央の閣僚たちはデシュムク州首相に対し、この状況に懸念を表明した。マハラシュトラ州出身であるシブラージ・パティル内相は「マハラシュトラ人にのみ仕事を」との見解に反対し、マハラシュトラの人々はあらゆる地域からの人々を歓迎すると語った。(*10月22日タイムズ・オブ・インド紙)

10月27日、MNS党首ラージ・タッケレイの反ビハールキャンペーンに怒った23歳のパトナ人ラフル・ラージが、ムンバイの二階建てバスの中で手製のリボルバーで1人を負傷させ、13人を人質にとっていたところ、30分後に射撃の名手により射殺された。

この事件に関し、果たして射殺する必要があったのかが大きな問題となっており、各方面から警察の対応に非難の声があがっている。

上記事件に加え、10月28日、UP州からの25歳の労働者がムンバイのローカル列車のなかでマハラシュトラ語を話す男たちにリンチされ、肝臓破裂で死亡する事件が発生した。

(*10月28、29日タイムズ・オブ・インド紙)

ラフル・ラージの遺体検視の結果、同人は至近距離(2フィート以内)から射殺されていたことが判明した。この検視結果は、生きたまま拘束されたのではないかとの論争に火をつけた。

(*11月6日タイムズ・オブ・インド紙)

UP州首相マヤワティはMNS支持者による北インド人に対する暴力を抑えることに失敗した中央政府とマハラシュトラ州政府を非難し、かかる暴力行為の責任者に直ちに行動をとるよう要請すると共に、被害者の遺族に20万ルピーを付与した。(*10月30日ヒンドゥ紙)

民族ジャナタ・ダル党首で鉄道大臣でもあるラールー・プラサドは鉄道や乗客の安全を保障できない州に鉄道サービスの提供を停止することも辞しないと警告した。

なお、プラサドは遺族に30万ルピーの補償金を付与すると発表した。

(*10月30日ヒンドゥ紙)

4.カシミール情勢

カシミール鉄道の第一段階の、アナンタナグから南のラジヴァンシェールに至る66kmの鉄道が完成し、その開通式がマンモハン・シン首相、ソニア・ガンジディー、 कांग्रेस党総裁、ラールー・プラサド鉄道大臣の出席のもとに行われた。このプロジェクトはジャンムとカシミールを繋ぐ1,120億ルピーの鉄道プロジェクトの一部であり、プラサド鉄道大臣は「鉄道建設工事はスピードアップされており、クァジグンドーバラムツラ間の鉄道工事は本年末までに完成されるであろう」と語った。(*10月14日ヒンドゥ紙)

日印協会註:カシミール鉄道はジャンムとカシミールを結ぶもので、ジャンムの北55kmのウダンプール市から始まり、290km離れたカシミールの北西の端にあるバラムツラに至る。

カシミール鉄道は1994年以来インドのいろいろな鉄道会社によって建設が進められてきたが、2002年同プロジェクトが国家プロジェクトに宣言されてから、めざましい進歩を遂げてきた。当初の完成予定は2007年8月15日とされていたが、2012年にずれ込むと見られていた。

長い間待ち望まれてきた管理ライン越の貿易が10月21日開始された。ジャンム・カシミール州

知事 N・N・ヴォラは、「管理ライン越の貿易は印パ関係の正常化を狙った重要な自信創出手段であると述べ、ジャンム・カシミールの人々は貿易の道が開かれたことにより同地域の経済発展を享受するであろう」と語った。

また、人民民主党(PDP)党首メヘブーバ・ムフティは、「これでわれわれの夢がかなった。人々は人の交流と貿易のための道路を開くために多大の犠牲をはらってきた」と語った。

パキスタン支配カシミール(PoK)首相アハメッド・カーンは『右貿易は両サイドの親密な関係をもたらずであろう。カシミールの状況がすぐに解決されるべきであるというのがすべての人々の望みである』と語った。(*10月23日タイムズ・オブ・インディア紙)

5.ベンガル州からタタ自動車プロジェクトの転出

10月4日、左翼戦線総裁ビーマン・ボースは、「シンゲール地方の青年たちは数ヶ月に渡り訓練を受け、選ばれたのに、いまや彼らは深く落胆している。州政府は彼らをいかに受け入れるかを考えるべきであり、タタが去ったことは悲しいが、この地域での工業化プロジェクトを継続すべきである。」と語った。またニルパム・セン西ベンガル州工業大臣も10月3日、「シンゲールで政府が収用した土地を返すことは全く考えていない」と言明した。

ボースは、TMC(トリナムル・ कांग्रेस)は過去2年間話し合いに全く応じようとせず、アジテーションの道を選んできたと、TMCを非難すると共に、TMCに言い寄っている कांग्रेस党をも批判した。(*10月5日ヒンドゥ紙)

10月5日ブッダーデーブ・バッタチャルジー西ベンガル州首相は「不幸なことに、我々は深刻な問題を作り出している非常に無責任な野党に直面している。ひとつの戦いには敗れたが、戦争に負けた訳ではない。シンゲールでのつまずきにもかかわらず、我々は前進しなければならない。西ベンガル州の大多数の人々は正しい考えをしており、我々の将来がどうあるべきかを知っている。顔を上げ、問題を克服し、前進しよう」と語った。(*10月6日ヒンドゥ紙)

タタのナノ自動車プロジェクトをグジャラート州のサナンド(アーメダバードから25km)に移転させるとの決定は、10月7日、ガンディーナガルでモーディグジュラート州首相とラタン・タタの共同記者会見で発表された。タイムズ・オブ・インディア紙との独占インタビューにおいて、タタはモーディの極めて真摯な熱意と契約締結にいたる迅速なスピードに大きな感銘を受けたと述べ、「goodM と badM がナノプロジェクトをグジャラートに移転させた」と語った。タタはシンゲールを去るのは悲しかったと言ったが、ママタ・ベナジーによって引き起こされた政治的瀬戸際政策のゲームから逃げて嬉しそうだった。(*10月9日タイムズ・オブ・インディア紙)

10月17日タタは新聞各紙に公開書簡を発表し、「シンゲールからナノ・プロジェクトを引き上げさせたのは、ママタ・ベナジー率いられ、私欲に駆られた人々と一部の政党に支援されたトリナムル・ कांग्रेस党のアジテーション、むき出しの敵意および対決的行動によって造り出された環境そのものである」とママタ・ベナジーを非難し、『西ベンガルの人々は法の支配と近代的インフラと産業成長で繁栄した州を築こうとしているブッダーデーブ・バッタチャルジーの政府を支持するのか、それとも対決、アジテーション、暴力と無法の破壊的政治環境によって州を破壊されるままにして置くのか。これを決めるのは西ベンガルの人々である』と問いかけた。

(*10月18日ヒンドゥ紙ほか)

日印協会註: タタのこの公開書簡は各方面に大きな反響をよんでいる。ママタ側は謝罪しない限り訴訟も辞さないと言っているが、各紙に寄せられた投書の圧倒的多数はタタを絶賛しママタを非難するもので、ママタを擁護するものは一つとしてなかった。

タタがナノ・プロジェクトの移転先としてグジャラート州のサナンドを選んだ時には、タタのこれまでの人道主義的経営実績を評価してきた人々を失望させ、特に、ラタン・タタがモーディ州首相と肩を並べ、彼をグッドマンと呼んだ点については、タタがこれまで築きあげてきた社会的地位と名声を台無しにするものであるとの投書も見られた。

この段階では、シングルを去った後も西ベンガル州首相を賞賛しいずれ西ベンガルに戻って来ると明言するラタン・タタと、モーディを賞賛するラタン・タタとの、どちらが本当の素顔であるかは判然としなかった。

しかし、今回の公開書簡は、すべてを明らかにした。タタの公開書簡はママタ側が憤るように、政治的書簡であり、ブッダーデーブ・バッタチャルジー州首相を全面的に支援するものである。天下のタタ財閥がこのような明確な支持を表明したことは、来年の選挙を控えたブッダーデーブ・バッタチャルジー州首相にとって何にも勝る援軍といえよう。

しかしながら、追い詰められたトリナムル・ कांग्रेस党内の過激派グループおよび一緒になってアジテーションおこなってきた Maoist を含む過激グループがブッダーデーブ・バッタチャルジー州首相に対しテロ攻撃を加える危険性は排除されない。事実、ブッダーデーブ・バッタチャルジー州首相は11月2日中央政府大臣たちと西ミドナプール地区の3,500億ルピーの鉄鋼プラント起工式に出席した帰路、Maoist による襲撃を受け、かろうじて危機を脱する(警官6人が負傷)という事件が発生している。

6. 国際関係

マンモハン・シン・インド首相の訪日(外務省ホームページより)

マンモハン・シン インド首相は、コール夫人と共に、10月21日から23日まで公式実務訪問賓客として訪日。シン首相は22日夕刻、麻生総理と日印首脳会談を行い、政治、安全保障、経済、経済協力、人の交流、地域的・国際的課題に関し意見交換を行い、会談後、「日印戦略的グローバル・パートナーシップの前進に関する共同声明」及び「日本とインドとの間の安全保障協力に関する共同宣言」に署名した。

日印首脳会談の主要な結果は以下のとおり。

日印関係全般

基本的価値と様々な利益を共有する両国が協力すれば、地域と世界の平和と安定に多大なる貢献ができるという認識を共有。同時に日印間の協力にはさらに大きな潜在性があることを確認。

政治安全保障

今回署名された安全保障協力に関する共同宣言に基づき、今後の具体的な行動計画を作成し、両国間の安保協力を進めることで一致。

経済・経済協力

麻生総理は、過去5年間で日本からインドへの投資額が10倍、企業数が2倍に増加したとの具体的な数字を挙げつつ、拡大しつつある日印経済関係をさらに後押しすべくEPAの早期妥結を目指したい旨発言。これに対し、シン首相も質の高い、互恵的で包括的なEPAの早期妥結の重要性を指摘。

シン首相は、日本からの長年にわたる経済協力がインドの経済・社会発展に大きく寄与してきたこと、インドが日本のODAの最大の受取国となっていることに対して謝意を表明。麻生総理は、インドの経済発展に不可欠なインフラ整備を支援すべく貨物専用鉄道建設計画(DFC)の西回廊への支援開始を決定した旨伝達。また両首脳は、デリー・ムンバイ間産業大動脈構想(DMIC)は日本の投資拡大にも資する多大な潜在性を有する構想であるとの点で一致すると共に、同構想実施のためのプロジェクト開発基金(PDF)に係わる国際協力銀行(JBIC)及びインド関係機関との覚書への署名を歓迎。

シン首相からは、日本からの投資拡大への期待が示され、インド政府として出来る限りの投資環境整備を行う容易がある旨発言。

麻生総理より22日のインドでの無人月周回衛星の打ち上げ成功への祝意を表し、両首脳は宇宙分野の協力促進につき一致。

人の交流

「麻生プログラム」の下、これまでに約3,700人の人の交流が実現したことを確認すると共に、本年度末までに約5,000名を招聘するとの目標を達成すべく、共に協力することで一致。

また、新設インド工科大学(IIT)ハイデラバード校への支援及びインド情報技術大学(IIT)ジャバプール校への支援継続を確認。

地域的・国際的課題、その他

両首脳は、国連安保理改革、世界経済情勢、気候変動問題等に関する協力を確認。

特に気候変動問題について、シン首相は、この問題に関する日本のイニシアティブを歓迎する旨発言。

不拡散・軍縮に関して麻生総理は、インドが核実験モラトリアムを含む「約束と行動」を誠実に履行することが重要である旨述べると共に、非核兵器国としてのNPT早期加入及びCTBTの早期署名・批准等を改めて要請。

インドを訪問中のロシアのセルゲイ・ラヴロフ外相は10月20日、プラナブ・ムカジー インド外相と会談し、モスクワによる原子炉の建設を含む原子力貿易の分野における相互協力関係の促進につき話し合った。12月にロシア大統領が訪印する際、この分野において協定が署名されるであろう。(*10月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

インドを訪問中の潘基文国連事務総長は10月30日、第9回ラジブ・ガンディー記念講演において行ったスピーチで、カシミール地域において印とパキスタンが管理ラインを跨ぐ貿易を開始したことに関し、「このプロセスに勇気づけられており、これが今後のより大きな変化のさきがけとなることを希望する」と述べた。(＊在インド日本大使館情報)

7.その他

中央政府は10月31日、6歳から14歳の児童に無料で義務的な教育を約束する教育の権利法を閣議で了承した。P・チダンバラム財務大臣は、「この法律は教育が子供たちにとって基本的権利となることを約束するものであり、無料で義務的な教育を提供することが中央や州にとり法的な義務となるであろう。」と語った。(＊11月1日ヒンドゥ紙)

日印協会註: コルカタの路上生活者の子供たち等教育を受ける機会のない子供たちに40数年に渡り、細腕ひとつで教育の機会を与えようと奮闘してきたロレッタ・ミッション・スクールのシスター・シリルにとっては何よりの朗報であろう。しかし、義務教育を実施するには、莫大な予算措置が必要であり、かつ、子供たちはその家族にとり貴重な労働力でもあることを考慮すると、義務教育の完全実施にはまだまだ長い道程を要するものと思われる。今回の決定が来年の選挙を念頭に置いた単なるアドバルーンではなく、インド政府が真剣に教育の拡充に取り組んでいく証であるとすれば、インドにとって歴史的な画期的出来事と言えよう。

5. イベント情報

(1) 印日商工会議所(チェンナイ)経済使節団の訪日 歓迎昼食会

GME 会長ヴィーラマーニ氏を団長とする18名で構成された標記経済使節団は10月14日から21日まで日本を訪問し、森会長への表敬訪問をはじめ、横浜、東京、大阪及び福岡において日本の各種経済団体とセミナー等を通じた意見交換を行い、インドの経済発展の現況を紹介し、我がほう政財界人のインドに関する理解を深めるうえで多大の貢献をしました。



挨拶をする菊池常務理事・事務局長
(鹿子木理事撮影)

当協会としては、日印経済交流を深めていく上でインドの重要な州との交流が極めて重要であること、上記商工会議所はインドで最初に設置された日本とインドの経済人による商工会議所であること、及び大都市チェンナイはインドの経済開発の機関車として重要な役割を果たしていることに鑑み、同使節団を当協会関係者に紹介するべく、歓迎昼食会を10月15日マハラジャ・レストラン(丸の内店)で実施致しました。右昼食会には多くの関係者の参加を得て、マハラジャ・レストランの特別配慮を頂き、盛大に執り行われました。

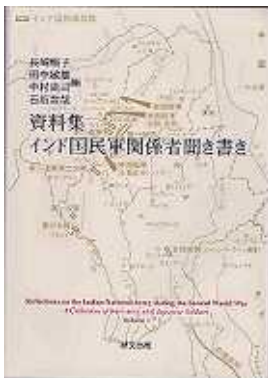
(2) インドを語る集い <様々なインド>協会講座 第19回 開催のお知らせ

『インドの風土と多様性』をテーマに、講師 増田容孝氏(日印協会会員 元大倉商事監査役)を迎えて、12月4日(木)18:00から協会事務所にて開催致します。

詳細は、同封のチラシをご覧ください。

6. 新刊書紹介

§ 『資料集 インド国民軍関係者聞き書き』



編者:長崎 暢子 田中 敏雄 中村 尚司 石坂 晋哉 編

発行:研文出版(山本書店出版部) 」

定価:10,000 円 + 税

第二次世界大戦中に、インド独立のために戦ったインド国民軍(The Indian National Army)関係者のなかでも、特に日本軍との連絡・調整役を努めた光機関の日本人を対象者として行った「聞き書き」を集めた資料集です。

聞き書きの形式や質問内容は、統一されていない部分もありますが、当時の状況を知る貴重な手がかりとなります。

§ 『インドからの道 日本からの道 - 「日印交流年」連続講演録』

監修:前田 専學

編者:日印交流年実行委員会(外務省南西アジア課)

発行:有限会社出帆新書

定価:2,800 円 + 税



日印両国は日印文化協定締結 50 周年に当たる 2007 年を「日印交流年」とし、それぞれの国において記念事業を実施しました。

その一環として、1 月から 12 月まで 12 回に及ぶ連続講演会が行われ、テーマは多岐に亘り、講師陣は第一級の識者・専門家が担当しました。その講演内容を「1200 年にわたる日印文化交流史を語る 大仏開眼からマルティ・スズキまで」(本書帯より)として、まとめたものです。

7. 掲示板

<会員の皆様のご意見宜しく>

『月刊インド』の内容を充実していくために、会員の皆様のご意見を是非お寄せ下さい。インドでの体験談など投稿は大歓迎です。『月刊インド』の感想もお待ちしております。

<日印協会近況報告>

「七人の侍」、といっても映画の話ではありません。10月には、シン首相ご一行とチェンナイ経済ミッションの来日という二大行事がありました。お世辞にも広いとは言えないスズコービル2階の当協会事務所は二つのご一行受入れ準備のため修羅場と化したのです。平林理事長以下事務局員の「七人の侍」が、てんやわんやしながら受け入れ準備に没頭していました。“案ずるより生むが易し”とはこのことでしょうか、蓋を開けてみましたらすべてが大盛況の裡にも順調に進行しました。これはひとえに関係者はじめ、多くの法人会員・個人会員の方々の絶大なるご支援とご協力の賜物であると事務局員一同、心から感謝申し上げる次第です。

<次回の『月刊インド』の発送日>

2008年12月号の発送は、12月12日(金)を予定しております。インドに関係のある催事のチラシなどを会報に封入しませんか？ 毎号同封のチラシをお読みの上、事務局までご連絡下さい。

～ 日印親善のために会員の輪を広げましょう ～

法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年、大隈重信、澁澤榮一等によって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。当協会の活動資金は、もっぱら法人会員・個人会員の会費で賄われております。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

| | | | |
|--------|-------------|-----------------|---------|
| 年会費：個人 | 6,000 円/口 | 入会金：個人 | 2,000 円 |
| 学生 | 3,000 円/口 | 学生 | 1,000 円 |
| 一般法人会員 | 100,000 円/口 | 法人 | 5,000 円 |
| 維持法人会員 | 150,000 円/口 | (一般法人、維持法人会員共に) | |



財団法人 日 印 協 会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ： <http://www.japan-india.com/>

電話： 03-5640-7604 Fax： 03-5640-1576 E-mail： partner@japan-india.com

